

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幢ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367  
振替 〇〇一〇〇一 九一五八四三二 労金 東京労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

## 〈もくじ〉

■巻頭言	藤澤 晃……………2
■環境問題と労働運動	
「社会民主主義政権」の終わりの始まり……………3	
― ゆれるドイツ社会民主党 ―	
差別は焼き尽くされなかった……………5	筒井 文一……………5
― 原水禁広島に参加して ―	
求められる人間的連帯の闘い……………8	
― 臨界事故、「下関」事件について ―	
春闘のあり方で電機と全国一般が激突……………9	
― 労組大会、後半戦の特徴(三) ―	
資料 全国一般大会での委員長あいさつ(一九九年八月二九日)……………13	
「春闘構築」の課題 電機労連委員長の大会挨拶に寄せて……………14	
押し込まれた現状で進むのは危険……………14	
― 国労北海道本部定期大会終わる ―……………15	
読者からのおたより……………15	

# 旬刊 社会通信

NO. 751

一九九九年二月一日号

一九九九年二月一日発行  
(毎月一日・二日・三日三回発行)

## 環境問題と労働運動

東海村臨界事故は、核燃料加工会社JCOの「裏マニユアル」による手抜き作業が原因であった。この事故に先立って発覚したイギリス核燃会社によるデータ偽造も大きな問題になった。また、トルコや台湾の大地震による建物の崩壊も、建築会社による手抜きが大きな原因だと指摘されている。

利潤追求が最大の目的である資本主義社会においては、このような手抜きや粗悪品の製造は日常茶飯事に行われているし、安全を無視した労働が強制され労働災害が多発していることも事実である。

マルクスは、『資本論』第八章「労働日」、特に第三節「搾取に対する法的制限を欠くイギリスの産業諸部門」の中で、労働法の適用がない無法地帯の産業部門についての例を挙げながら、長時間労働だけでなく粗悪品製造や今日で言う「公害」の問題にも言及している。例えば、マッチ製造業では燐による中毒の問題を、製パン業でのパンの不正製造の問題などを取り上げている。

ところで、われわれが経済学を学習する際に注意しておかなければならないことは、商品の価値と価格は一致するものとして、また、商品も「まともな商品」を生産していることが前提とされていることである。ところが、現実には価値と価格は一致しないし、粗悪品の製造も当然のこととして存在している。しかしながら、このことがわれわれの間ではあまり議論されてこなかったのではないだろうか。

一項はやった議論に「労働力の再生産費」の問題があった。大幅賃上げの理論的根拠として出されていた問題である。この中で大きなウエイトを占めていたのは、なんとといっても労働者が消費する生活手段（生活必需品）の問題であった。ところが、この生活手段について、量が問題にされていた割りには、質についてはあまり関心が払われていた気配はなかったように思うし、賃金の額については侃々諤々（かんかんががく）の議論があったが、自分たちの消費する商品の質（使用価値）についてはついで議論されたことがなかったのではないだろうか。

ダイオキシンや環境ホルモンをはじめ、遺伝子組み換え食品など環境問題がマスコミにぎわさない日はないし、国民の関心も大きく盛り上がっている。ところが、この環境問題について労働運動が積極的に取り上げたという話は聞かないし、われわれの周りでも合理化や失業問題ほどには関心がないのが現実ではなからうか。

いま、われわれが消費している商品を見ると、添加物だらけの食品や農薬づけの野菜、人体に有害な合成洗剤や化粧品など「まともな商品」と言えるものはほとんどない。そして、「安全で安心」な商品は、有機栽培の野菜などのように「少々お高い」。粉セッケンがなかなか普及せずに合成洗剤が使われているのも「お値段」のせいである。

「健康で働き続け、生き続ける」ためには、「まともな労働力」の生産・再生産が行われなければならない。ところが、今日われわれが消費している公害だらけの商品（粗悪品）は、労働者の生活費（労働力の再生産費）を押し下げ、結果として剰余価値を増やしている。そればかりか、ガンやアレルギーなどの現代病を引き起こし、労働者の命を縮め、環

境ホルモンなどで人類全体の絶滅さえもたらそうとしている。

マルクスは、生産と消費をまったく別のものとする見解に対して、生産は生産手段を消費することでもあるから生産的消費として、消費は労働力を生産（子供）し、再生産することでもあるとして、消費的生産としてとらえること、すなわち、対立物の統一としてとらえなければならぬと述べている（『経済学批判序説』）。

消費者問題はシャモジを抱えた主婦がやること、環境問題は自然保護団体がやることであると思っていた時期が私にもあったが、大きな間違いであった。「二十四時間闘えますか」という言葉があるが、労働者は職場生産点だけでなく消費の場である家庭でも資本に支配されている。環境問題を労働問題に矮小化してなく消費の場である家庭でも資本に自分たちの問題として環境問題を積極的に取り上げなければならぬ時期に来ているのではないだろうか。

（藤澤 晃）

## 「社会民主主義政権」の終わりの始まり

— ゆれるドイツ社会民主党 —

社会民主主義政権を代表するのは、ドイツ社会民主党（SPD）だ。昨秋十月の政権獲得から一年も経たず、SPDが足元から揺れている。今年に入り、ヘッセン州（二月）、ザールランド、ブランデンベルグ、チューリンゲル、ザクセン（九月）の州議会選挙、ベルリン市議会選挙（十月）でいずれも大敗し、連邦参議院（定数六八。議員は各州政府によって任命される）で過半数を失い、重要法案では保守のキリスト教民主・社会同盟（CDU・CSU）との協議なくして、一本の法案も通せないことになった。これは昨年、コール首相が総選挙で敗れ、辞任を余儀なくされた事態とまったく同じだ。

ヨーロッパ連合（EU・一五ヶ国）中、社会主義インター加盟の党が一三ヶ国を占め「新しい社会民主主義」の時代が喧伝（けんでん）されたのは、イギリス労働党のブレアが総選挙で大勝利した九七年五月からのことだ。クリントンのスタイルをまねたブレアの人気も陰りをみせ、SPDの凋落がにわかに「社会民主主義政権の終わりの始まり」の様相を急速にみせたのはなにゆえであろうか。

### ドイツ社民党の路線転換

ブレアは「労働党は新中産階級に支持基盤を移す」と、イギリス労働党の路線を独占的大企業の利益を代表する人びとの立場に寄せた。他方、SPDは「高失業克服と社会的公正のための政治転換」が必要と、政権樹立直後、①低中所得層の減税、②社会保険負担の軽減、③病休時賃金全額保障、④健康保険の医薬品代など患者負担の軽減措置、⑤高失業解決をめざす政労資三者代表による「雇用の同盟」からなる即時実行計画を策定し、実行に移す姿勢をみせた。このように、ブレアの勝利とSPDの勝利の背景はまったく違っていたのだ。

SPDは三月、左派で党首・大蔵大臣のラフォンテーヌを党から追放。それ以降、SPDは「庶民のために存在するという素地」を急速に失い、地方議会選挙で連戦連敗することとなった。

第一、「財政拡大から財政緊縮策」への大転換である。六月、シュレーダーは単年度としては戦後最大の財政支出削減を含む「財政緊縮・税制改革案」を提案した。その内容は①失業手当、公務員給与抑制などを柱に二〇〇〇年予算で財政支出を一律七・四％削減する、②中心は社会保障関係費の削減で、失業給付金を削減、年金給付の賃金スライド制を停止することなどで約百三十億マルクを削る、③一連の税制改革も修正し、現在四〇％の法人税を二〇〇一年から二五％に引き下げ、四月に導入した環境税を段階的に強化、さらにガソリン税引き上げ、電気料金への課税というものだ。

第二、シュレーダーは六月イギリスのブレアと「共同声明」を発表した。その中心テーマは、日本の日経連やフランスのシラク大統領らが強調する「第三の道・新中道」というもので、政権レベルの新しい社会民主主義の結集を訴えていることだ。その内容は①一九七〇年代までの社会民主主義を克服の対象としていること、②これまでの「結果の平等」への志向から「機会の平等」の強調、③所得の再分配を基礎とした福祉から、働くことを基礎とした福祉への転換、④企業や個人の経済活動の成功への刺激の重要性、さらに「左翼のための供給の経済学」を積極的に主張していることである。

この考えは、日経連のブルーバード・プランのそっくりさんだ。したがって、ユニオン連合が大会方針で主張していることと同じである。たとえば「われわれが支持するのは市場経済であって市場社会ではない」といった一文である。

第三、コンボへの軍事侵攻である。外相は緑の党出身者。SPDも緑の党も基本理念は「平和」「人権」「連帯」である。コンボでは第一次世界大戦でおこったことが、くり返されたのである。社会民主主義の基本理念であった「平和」「人権」「連帯」は一夜にして吹っ飛んでしまった。

SPDへの打撃はもとより、これによって、最大の影響をこうむったのが緑の党であった。同党はSPD以上の打撃を受け、ほぼ壊滅した。来年春予定されているシュレスウィヒ・ホルスタイン、ノルトライン・ウエストファールンの州議選結果いかんでは「赤・緑」連立解消、あるいは緑の党の消滅すら予想される。

### 政策・路線論争が公然化

第四、こうしてSPD内の政策・路線論争が公然化していることである。

SPD最大の支持基盤である金属産業労組（IGメタル、二百八十万人）は、高失業克服の手段として老齢年金の支給開始を現在の六十五歳から六十歳に引き下げるよう要求。SPDと緑の党連立のシュレーダー政権が十一月までに年金改正案を提案しない場合は、政労資三者「雇用の同盟」からの離脱も辞さないことを表明。上部組織であるドイツ労働総同盟（DGB、八百三十万人）も同様の事態であり、DGB委員長は「連立政権は政府債務克服のために選ばれたのではなく、失業克服のために選出されたのだ。しかし企業に圧力をかける努力を欠いている」とシュレーダー政権をきびしく批判する。

社会民主党内部の抗争も激化している。路線変更には左派勢力が反発。「伝統的な路線」への回帰の声が強まっている。ブレア同様、シュレーダーが「新しい中間層」志向の政策に転換したことは、指導部と現場の矛盾を高めずにはおかない。

# 差別は焼き尽くされなかった

—原水禁広島に参加して—

広島は朝から暑かった

「今年の広島はちがうぞ。広島は暑い」そんな声に胸がおどり、八月五日、まぎわに決意して原水禁世界大会ヒロシマ（八月五、六日）に参加しました。

八月六日（金）朝八時三〇分、慰霊式での小渕首相の「日本国憲法を守り、非核三原則を守る」という挨拶に怒りと震えを覚えめました。八月六日、今日は雨という予報でしたが、お店の人は、「広島は八月六日は、雨が降らないよ」と話しかけてきた。原爆慰霊祭に参加している中で、広島は夏は暑いと感じ、セミの声に余計に暑さを感じました。

## 強烈な印象 李さんの話

八月五日（木）、「平和を考える新社会党の集い」に参加しました。

その中で講演で、在日本朝鮮人被爆者連絡協議会会長 李実根（リ・シルグン）さんの話が強烈に印象に残りました。

私は、軍国少年でした。航空学校の試験を受かり、一九四五年の一〇月から千葉の航空学校へ行く予定でした。日本の勝利を疑わなかった。

私は一六歳でした。その頃、神戸に買い出しに行っていました。広島を八月五日の夜見たときは、広島は生きていた。街そのものが生きていた。

八月六日神戸の永田に居り、夜行に乗って帰るのが、明け方。汽車は動かない。線路を数人の仲間と歩いて帰った。被爆体験には、直接・体内・救援・入市と四種類あるが、私は入市で被爆した。

七日朝見たヒロシマは、死の街だった。爆心地に近づくほど凄まじかった。足も手もバラバラな人、真っ黒焦げになった人、地獄だ。何千発の焼夷弾が落ちてもこのような状況にならない。爆弾による大きな穴もない。その時、日本は戦争に勝てないと思つた。

## 「きさま鮮人だな」

ある朝鮮人は爆心地から一・二kmの所で被爆した。爆心に背を向け仕事をしていた。原爆が落ちたとき何が何だか分からなかった。そばにいた馬がおお向けになり、真っ黒になつていた。周りの人は誰もいなくなつた。すべて死んだ。背中が熱いので、川に飛び込んだ。

あまりにも痛いので、救護所を探した。テントがあつた。軍医がいた。「タスケテクダサイ」といったら「きさま鮮人だな」（鮮人、半島人という言い方で。軽蔑した言い方。「朝鮮」の「朝」は、朝廷（天皇）を指すから使うなとされていた）

「私は朝鮮人です。助けて下さい」と何度も何度も額を地面につけて頼んだが相手にされず、追い出された。しかたなく、川に入った。胡瓜、馬鈴薯をすりつぶし、その汁を背中に塗りこみ、どぶろくを飲みながら生き延びた。今もケロイドの跡が残っている。

鉄が溶け、建物が焼き尽くされたが、差別は焼き尽くされなかった。原爆で広島二十万人の内十数万人が死んだといわれる。ここには、朝鮮人が入っていない。日本の侵略の中で、土地を奪われ仕事を奪われ、人が足りないからと連れて来られた朝鮮人、その内、広島に五万三千人がいた。四万八千人が原爆で死んだ。この事実をしっかり知ってほしい。

鉄も溶け、石も焼け、すべてが焼き尽くされたのに差別だけは焼き尽くされなかった。日本政府は、ヒロシマ・ナガサキで被爆した日本国内に居る人については、外国人であっても治療してくれるが、国外にいるものについては何ら保障がない。どこにいても被爆者には変わりがない。

### 考えてほしいこと

みんなに考えてもらいたいことが三点ある。

第一に、日本の平和運動はなぜ、八・六、八・九なのか。今の世の中の動きもそうだが、悪い政治が、戦争を起こし、原爆を落としたのだ。戦争の国家責任を追究すべきだ。オランダのハーグの平和会議へ日本から四〇〇人も参加した。中に被爆者もいた。しかし、話をする機会を与えられた集会は、小さな集会で、大きな集会での機会がなかった。日本の平和運動は、こんな風に世界からみられているのだ。

第二に、アメリカになぜ、原爆を落としたのかと厳しく追及しないのか。マンハッタン計画を進めてきて、アメリカの科学者は、「原爆を使うな」と政府に対応した。しかし、トルーマン大統領が、「研究・実験に三年間で二〇億ドル費用がいった。それに、ソ連が日本に参戦する」という中で原爆が落とされた。広島に原爆が落とされた理由として、「広島は、空襲を受けていない、無傷の都市。捕虜収容所がない。ウラン爆弾の試みをしてみたかった。ソ連の日本への阻止と戦後のアメリカ支配を確かなものにするため」であった。

第三に、アジアの人々は、今、日本に注目をしている。昨年の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）のテポドン（人工衛星）の話。外務次官が、その頃、広島に来た時の話だが、「地球の自転に合わせて打ち上げているから、テポドンは、人工衛星だ」と述べていた。しかし、報道は、正しいことを報道せず、北朝鮮をバッシングした。それに、日本の上空を超えたというが、上空二〇五kmは、宇宙であって、領空侵犯ではない。こんな事実をしつかり知ってほしい。

世界の中でも、日本人は知的レベルが高いといわれているが、政治思想は低い。もともと政治に関心を待持ち、悪い方向を阻止していくことが大事である。

以上、私たちに期待を込めて話をしてくれました。まために、小森龍邦党中央本部副委員長は、李さんが、「今の政党で本当の意味で闘っているのは、新社会党だけだ」といつてくれたことに勇氣と自信を持つと初めに話されました。そして、「今、私たちは何をすべきなのか」と問いかけ、広島における「日の丸・君が代」問題について詳しく述べられた。

### 国民主権の中で、天皇を賛美する国歌はおかしい

天皇は、世襲である。生まれながらに身分が決まっているのは、身分差別である。また、

男子のみ継承というのは、あらかじめ女性を排除しているということで、女性差別である。校長を殺したのはマスコミによると、「部落解放同盟が、教育介入している元凶」といわれている。

人間平等を謳い、実践してきた、良心的な校長が自殺した。前々日に、校長が「卒業式には、『君が代』のテープを流さない」と教職員に話をした。それ以前から、県教委に対して、職員間との合意のもと「職員と交渉したことにしておく」と架空の時間を県教委に報告をしていた。県教委から前日、「明日は絶対『君が代』を歌わせよ」と職務命令があった。午前一〇時、県教委が校長宅にくる前に自殺した。

解放同盟は、マスコミで言われているように世羅校長に直接会っていない。県との糾弾のなかで、「良心的で一番弱い校長をねらったのか」と問い詰めた。実際に「君が代」を歌っていない高校がある。政府は県教委への虚偽の報告書「職員と何度も交渉をもった」をうまく利用し、マスコミを通じて、組合との板ばさみと報道した。政治がでたらめなことをやっている時には、うそも大きくなるのがよく分かる。戦争前の報道管制が、軍部に都合よく報道していたのと同じである。形の上で、戦前と同じになってきている。

### 「君が代・日の丸」は人権、平和の問題

「君が代」は人権の問題で、「日の丸」は武力の象徴つまり平和の問題である。

平和と人権はセットであるが、逆の意味で人権を奪い、戦争への道につながる「日の丸・君が代」の法制化にせまってきた（八月九日、「日の丸・君が代」法制化となる）。

ヒロシマは軍都であった。宇品港（広島港）から、アジアへ兵を送った。李さんの話にもあったが、原爆は無差別爆弾である、アメリカを責める必要がある。日本は、「国体護持」（天皇制の存続）の名のもとに、非人道的な原爆投下について、何も言わないことを約束した。比治山のアメリカ原爆被害調査所（ABC）についても何も言わなかった。

このような中で広島では、人権、平和教育に対する意識が高く、「日の丸・君が代」反対についても同様に意識が高かった。このような状況だからこそ、自民党政府は、広島を何とかせねばと考えた。そのことが、今回の世羅高校長の自殺につながった。

### 言うべきことは言う、団結が大事だ

もう少し、声を大きくして、言うべきことは言うことだ。必ず、民衆は聞いてくれる。調べ物をしていて、あるパンフが私の心を強く動かした。東大教授の井手たかしさんは、東大のレッドパージの時に、学生にメッセージを送っている。そのパンフだ。

自身は「諸君、『きけ、わだつみの声』の手記の中に、天皇のおんためにとか、世の中のからくりを分かっているも死んでいったことが書かれている。この手記を読んでもみると、学生はバラバラになつている。正しいことを進めるためには団結が大事だ。団結広めよう」とかかかれている。

新社会党は、小さい。マスコミは無視する。憲法の明文改憲までには、なんとか迎え撃つ体制を作らなければならない。新社会党の議員が少なかつたとしても改憲には直接投票で国民の過半数が必要な今、世論では、「君が代・日の丸」法制化に反対する声が五〇%以上を越えている。

世論に、国民に働きかけよう。本当の意味で改憲阻止、護憲で闘っているのは新社会党だけだ。国民過半数の改憲阻止を勇氣と自信を持ってがんばろう！

八月六日午後「ヒロシマ大行動」に参加。夜どうしても用事があるので、三時広島をでようと思っていました。集会の熱気を受け、デモに参加しました。広島は、やっぱり熱かったです。

二〇〇〇人のなかまとデモをしながら、今できることは、精一杯やろうと思いました。子どもや孫のためにも勇氣と自信を持ってがんばろうと思います。(筒井 文一)

## 求められる人間的連帯の闘い

— 臨界事故、「下関」事件について —

くらいい事故や事件が相次いでいる。

「包丁男、一五人殺傷。JR下関駅。車で突入無差別襲撃」(神戸新聞、九月八日)。三五歳の容疑者は「何をやってもうまくいかない。社会に不満があったから、だれでもいいから殺してやろうと思った」と供述しているという。

九月八日、東京池袋で二三歳の青年が歩行者を包丁と金づちで襲った事件でも「自分は努力しても報われないのに、池袋や新宿で日中から仕事もせずに遊んでいる人たちが許せなかった」と供述している。

九月三〇日には、茨城県東海村で日本初の臨界事故が発生したが、その原因が安全を無視した「裏マニュアル」と、それをも無視し、「手作業」で手間を省いたためだという。「JCOが違法と知りながら、手間を省いて作業効率を上げたのは、生じた余剰人員を別の部署で使おうとしたためではないか」(同、一〇月四日)。

何という社会現象であろうか。私は最近流行のモラル・ハザードという言葉思い出した。日本語に直訳すれば、「道徳の危険」とでもなるか。一方は、失業、不安定雇用労働者の増大など競争社会でのいいようのない不満の衝動的な現れであり、一方は会社ぐるみの効率優先の結果である。内容は違いが、背すじが寒くなるような現実である。しかしここで一般的に倫理や道徳について語るつもりはない。

全融ビッグバンとともにモラル・ハザードという言葉も出現してように思うが、バブル崩壊後、「改革」という名で、社会のすべての面に競争が強調され、激化する中で、人間的な紐帯がぶれているように思えるのである。効率優先の競争社会の中で人間性そのものが奪われているのではなからうか。

私は本来楽観主義者であるので、社会は人間が作っているものである以上、人間の手で変えられると思っている。問題は、社会を変えていく人間の連帯活動である。

第一は労働組合を中心とした労働者自身の団結、連帯である。本来、労働組合は、労働者間の安売り競争を排除するものとして存在する。その意味では、規律、規制とともに抑圧、差別に対する共同した闘いが必要である。

下関事件についても、池袋事件についても、彼らは相談するところがあったのだろうか、と考える。多くの人々は、このままの社会状況が続けば第二、第三の「下関」「池袋」は



おこると思つてゐる。多発する自殺もそうである。そう考えると、現在労働組合は機能しているのか、労働運動はどうなつてゐるか考えざるを得ないのである。

第二は、臨界事故にみる社会的規制という力の問題である。三人の作業員は無資格だったという。安全教育を含めて、安全対策はどうであつたのか。労働条件はどうであつたのか。これまた労働組合の問題であるが、これをこえて、「原子力」は国策として進められている。神戸新聞（一〇月四日）が「米紙が日本を痛撃」というおもしろい記事をのせてゐる。それによるとニューヨーク・タイムズはもつとも戸惑う点として「唯一の原爆犠牲国として核問題に真剣な注意を払い、同問題を外交や国内政治の中心に据えてきた日本が、なぜ自らの核エネルギー利用に関しては気概のない取り組みしかしないのか」と指摘しているという。

M〇X運搬船が、臨界事故の真最中に高浜原発に到着した。欧米では危険だとして見送られてゐるプルサーマル計画が発足する。しかし、臨界事故はその計画を狂わせた。「このままでは原子力政策が一五年や二〇年は遅れてしまふ」と通産省や電力会社が反省もなく嘆いてゐるが、騒ぎがおさまれば、性懲りもなく推進するだろう。唯一の被爆国よりもそれこそ効率優先の国策なのである。

モラル・ハザードとともにセーフティ・ネットという流行語もある。安全対策、社会的規制ということであろう。しかし、それもまた、国策にたち向う社会的な力が必要である。労働運動、住民運動とそれを支える人間的連帯のみが、くらしい事故や事件を少なくすると確信するのである。

(松)

## 春闘のあり方で電機と全国一般が激突

— 労組大会、後半戦の特徴 (三) —

労働者生活は「臨界点」まぎわ

司会 二〇〇〇年春闘の時期となつた。来年は二十世紀最後の年。春闘のみならず、反戦・平和、職場闘争に象徴された日本労働運動のゆくえについて、ざつとばらんに語つて。

A 時代はまさに「世紀末」といつてよい。春闘だけが混沌としてゐるわけじゃない。政治は「大政翼賛」だが、永田町（国会の所在地）だけの話で、永田町政治と労働者生活は「臨界」状況に入った。来年の介護保険導入後、大荒れになる。自・自・公は小手先でしのぎたいとのハラだろうが、すでにそんな状況ではない。かならず反乱が起きる。長野で参院選補選がおこなわれているが、自民が大敗けするのではないか。

経済だつて同じ。巨大資本は人権費削減に首切りで利潤率をふやしている。しかし、労働者、小零細業者に景気が上向いてゐるとの実感はまったくない。政府は「悲壮感はダメ。樂觀論で」としめつけを強め、実体が正確に反映されてない。アメリカの経済・株価動向ともかかわるが、金融恐慌の再来は必至だ。大金融業の「合併・合同」劇は、時代に流されてゐるだけで、戦略・哲学はない。

労働者生活はさきの東海村やJRW日本の事故と同じように、「臨界」状況にある。ちよつとびつくりしたんだけど、民間政治臨調Ⅱ二一世紀臨調の旗振りをやつてた山口二郎君（北海道大学法学部）が、「連合総研レポート」（九九年十月）で、「ある種の『階級

政治』はある」と云ってんだ。

「私は依然としてある種の『階級政治』はあるのではないかと思っている。つまり、銀行がつぶれそうだったら、三〇兆円という巨額のお金が用意される。ゼネコンがあぶないといったら、金融機関を説得して債権放棄させる。みんな多かれ少なかれ困っているのに、特定の人たち（自民党の後援者ども）が困っているとすれば、すぐに政治が動くということがある。しかも、事実根拠がなく、特定の人たちの利害に沿う政策主張があったかも真理であるかのごとく世間に流布して、みんなそんなものかと思ひ込んでしまう。そこに一つの『階級政治』というものが、いまでもあるのだと思う」。

**C** 民間政治臨調の茶坊主だった山口君がそういつているの。  
**B** たしか一ヶ月くらい前の『赤旗』にも民間政治臨調で小選挙区制賛成したのも、「こんなはずじゃなかった」と反省してた。

**C** 反省なら猿でもできる、しかし、山口君みたいな人物が「階級政治」を云々するってのはおもしろい。まさに、「世紀末」現象のあらわれだ。

**D** 山口二郎君ってどんな人物。

**A** あなたでも知らないの。

**D** 日本を動かす人物なの。知ってるのはあなたの方だけじゃないの、小物でしょ。

**A** 北海道大学の行政学の教師で、小物にちがいない。その人物が「階級政治」を言い始めたことに、現代政治の矛盾のあらわれがあると考えればおもしろい。

**C** 世紀末、かならずシュトルム・ウント・ドランク（疾風怒涛）の時代に入る。それはまちがいない。おもしろくなるよこれから、とりわけ来年四月以降の情勢は。

**司会** 私も同感だ。ところで日本労働運動、とりわけ春闘のゆくえはどうか。

#### 成果・成績主義で矛盾拡大

**B** ユニオン連合はしつちやかめつちやかで、春闘だけではない。先の民主党の党首選で「異星人（ET）」の鳩山由紀夫君が、憲法九条改正を公約に運動始めたとき、連合会長、事務局長ともに「困った」という雰囲気だった。

**D** 自治労が憲法問題では、JC流には動けない。

**B** そういうこと。自治労は連合七五〇万の一〇〇万強を占める。自治労に反旗をひるがえされたくない、というのが会長・事務局長のおもいだ。

**D** 自治労の県本部の幹部諸君はなぜ連合をこれほどまでに過大評価するのかしら。彼らが、「ぼくらはこう考える」、したがって連合の欠陥・弱点はこうだと言えば労働運動の流れは変わるじゃない。

**B** ずうっと、それを望んできたんだけれど。「ミイラ取りがミイラになった」状況だ。

**D** 介護や地方分権、さらにこんにちでは「人勸完全実施」だろう。東京じゃ一年間に四九万円減収、三年間で一五〇万というじゃない。

**E** そうなんだけど、東京はじめ全国の県・道・府で「ストライキの構え」で抗する気迫に欠ける。だけど、Bさんの指摘された点とかかわるが、来年四月以降の状況は分からない。変化が起きても不思議じゃない。

**司会** 必ず大きな動きがおきる、というのがぼくの感じた。景気はよくなるらない、ダボハ

ゼミたいな首相が自信もって、首切り、賃下げだけはどんどん進み、「エリート」といわれた層が切れ、自信失ってる。かつてない事態だよ。さらに深刻なのは、三十代半ばの中堅層が、将来への展望を失っていることだ。これには、二十〜三十代の若い層とわれわれ五十代の「断絶」がある。

A 若者は能力給は求めても、成果・業績給には思いをいたしてない。過日ある学習会で賃金論でくわしい報告があり、能力給と成果・業績主義にふれられた。どちらも変わりないけれど、成果・業績給となれば、年俸制。日本で年俸制の典型がプロ野球・サッカーとなるが、巨人の清原君のように「巨人、清原ファンにはごめんなさい」「業績」でわりきる土壌はまだありませんよね。だから、日本には成果・業績主義はなじまない。ほくはそう思います。

司会 同感だ。今はやりのグローバリズム、アメリカ流資本主義にふり回されているだけだ。日本は「流行」、「外庄」に弱い。おたがいに戦略的に考える、それが無い。

## 二〇〇〇年はバラバラ春闘？

司会 二〇〇〇年春闘はどうなるの。

A みとおしはまったくない。諸説入り乱れ、星雲状況にある。JCは春闘はやめにという鉄、電機に対し、造船や自動車はそうは言えない。旧同盟系にしてもバラバラ。旧総評系は全国一般、全港湾を除きものを考える能力をなくしている。だから、前回に言ったんだが、国労が「国鉄闘争」の力を背景に、全労協とともに迫力ある運動を展開することが時代の要請なんだ。現代は、「星雲状況」、「ビッグ・バン」で、求心力はない。その求心力が、国労と全労協なんだけけれど。

国労には残念だけど、その気迫・戦略は不十分。現場の仲間になんかそれを求めたい。力は十分にあるんだから。

司会 連合、全労連ともに日本労働運動を再生する力はないことはわかった。しかし、どう再生への展望をつくるの。

C きわめて単純。運動あるのみよ。

B 「運動あるのみ」っていうけどさ、自治労、日教組「左」を自称する人は、連合結成以来そういつてたじゃない。しかし、それは破たんした。

C 彼らは「運動してない」、破たんするの当然じゃないの。理屈だけなのよ。運動すれば、「集まり、論議し、方針つくる」ことが必要になる。どんな組織、党派ともね。

D 旧社会党が解党しバラバラになったことが大きい。こんな深刻な情勢なんだから、「大きくまとまる」ということできないの。

C 心では願っていると思う。

D なんとか結集できないの。

司会 それで全国歩いているんだけど、率直に云って容易じゃない。春闘の論議状況はどうか。

## 全国一般が電機連合に反論

A 諸説入り乱れ星雲状況にある。注目点の第一は連合が統一基準を示すかどうか、第二

は要求の根拠をどうするか、第三は春闘にとりくむのかどうかだ。すべて春闘の根幹にかわる。

これまで三つの考え方が出されている。春闘をやめてしまおうという電機連合や鉄鋼に対し、全国一般が全面批判を展開していること、さらに連合事務局長が九月の中執に提出した「二〇〇〇年春闘基本構想メモ」だ。

**B** 連合事務局長はどうしているの。

**A** 冒頭、連合として①社会的所得分配メカニズムの実践、②マクロ経済の改善、総合生活改善のとりくみという立場から「春闘はやる」といつている。しかしとりくみの内容については①賃上げ交渉中心、②協約改定交渉等ときわめてあいまいだ。要求基準は連合として統一したものを示すか、それとも産別レベルに任せるのか。要求方式は個別賃金中心としながら、①上げ幅（ベア）で要求するのか、②賃金到達水準か、③最低到達水準（ミニコム）かと選択肢を示している。賃上げの要求根拠については、従来どおりの「定昇＋物価Ⅱ生活向上」か、それとも「産業・企業の実情優先の要求設定」かとしている。前に述べたように、連合内部がバラバラな状況を、事務局長メモははしなくもさらけ出しているわけだ。結局、意見はまとまらず九九春闘と同じことになるのではないか。

**C** 全国一般は「反失業闘争の構築」を提起しようだが。

**D** 「反失業闘争の旗を掲げよう」と①理不尽な解雇や人員整理に徹底的に闘い、雇用と労働条件を守る運動の組織化、②失業に対する社会的な規制の闘いを提起している。この背景には全労働者の七八%を占める中小労働者が大企業労働者以上にすさまじい首切りと解雇攻撃にさらされている実態がある。

**A** 失業の「根本」にむけた闘いを提案しているわけだ。

**D** そう。旧総評らしさを今もって保っているのは全国一般と全港湾だけといって過言でない。

さらに「ガンバレ」と拍手したくなるのが、春闘あり方にも鋭くかつ具体的に提案していることだ。「春闘再構築」の課題として電機連合委員長の見解にたいして①連合のすべての構成産別と地方連合がナショナル・ミニマムの運動に責任をもつ立場から、実在の組合員の年齢別賃金水準の公開、②系列企業への賃金水準を波及させる運動の体制づくりを訴えていることだ。おもしろい指摘だから資料で紹介してよ。

**司会** わかった。

**D** 日本労働運動は明らかに転換点にある。賃労働と資本の対立が日々明らかになつていふのだから、現状に流されてすべてを失ってしまうのか、それとも原則に立ち返り労働者の要求を資本にぶつけるのかが問われていると思う。

### 月給制から時間・日給制も視野に

**司会** ところで日経連はどう考えてるのか。

**E** 日経連の現在のスローガンは、「ダイナミックで徳のある国」、小淵のそれは「富国厚德」。日経連・自民党の最大関心事は「生産性や競争力の向上」「構造改革の徹底」だから、従来の日本の労資慣行はすでに崩壊した状況にある。「会社社会」は漂流を始め、「ポスト会社社会」をどう再構築するかに焦点が移った。

「痛み」が全労働者を襲う。そこで、どう再度「会社忠誠心」、さらには「国家意識」をつくるかとなり、新たなキャンペーンが開始された。それは「社会の主人公は人間であり、資本は人間より高次元な生活をするために、適切に活用されるべきもの」との視点から①創造的で健全な競争社会、②人間の顔をした市場経済、③多様な選択肢を持った経済社会が宣伝され始まったことだ。この点での危機感は大いと思う。

B 「徳のある国」とか「有徳」だと、もっともモラルハザードして人物が言い出したことね。これは危険だよ。「日の丸・君が代法」が典型だ。しかも、十一月十二日には、「天皇在位十周年式典」が国立劇場でおこなわれる。「日の丸・君が代」||「天皇制」が、あらたな「国家統合策」と考えられるといつて間違いない。すでに「日の丸・君が代」強制が全国で相次いでいる。

E 金融大再編は製造業等すべての企業にすさまじい影響を与える。どうなるかは「神様も分からない」状況だ。そうすれば、とうぜん労働組合の協力が絶対的条件となり、ユニオン連合との「対話」が必要となる。だから日経連は春闘をやめたいけれどやめられない。最近、日経連が春闘を「知的な対応の場」というのはその意味だ。

C 日経連の春闘への位置づけは、『日経連五十年史』にも明らかだが、「構造改革」春闘というものだ。「構造改革」にはすさまじい痛みが全労働者に襲いかかるから、日経連から「春闘はやめた」とパイプを切ることは絶対ない。

E 八月行われた日経連セミナーでは、賃金の絶対的切り下げが論議されている。成果・成績主義、さらには非正規労働者の拡大で賃金をこれまでの月給制から時間・日給制に変えるというのだ。連合がすでに実行に移している個別賃金方式を逆手にとった攻撃だ。さらにワークシェアリングの論議もこれに作用する。ワークシェアリングに対する考え方は労組側が「ノー残業・年休完全取得」であるのに、日経連は「一人分の賃金を二人で」だ。首切りはこれから本番を迎える。二〇〇〇年春闘ではこういったことが新たな論点になっていくのではないか。いずれにせよ、労働側は「賃金とは何か」を中心に、労働者の労働・生活実態を正確に点検し、労働運動の原点である「抵抗し要求する」姿勢が求められる。

多くの幹部は気迫、理論的能力を失っているから、職場の第一線活動家がそれを担わざるをえない事態に突入すると思う。五十歳前後の活動家はその能力をもっている。だから「指令・指示」が混乱し始めた今、五十の手習いを始めるときだ。できると思うよ。

資料 全国一般大会での委員長あいさつ（一九九九年八月二九日）

## 「春闘構築」の課題 電機労連委員長の大台挨拶に寄せて

連合内での春闘をめぐる論議は、議論から具体的な変化に移行しています。中小労働運動の立場からこの点に触れないわけにはいかないのですが、私は過日開催された電機連合定期大会での鈴木委員長の委員長挨拶から引用させていただきます。春闘論議に参加したいと思います。電機産業は部品や情報関連の下請けなど裾野が広く、全国一般の組合員の中でその裾野に位置している組合員も少なくありません。地域・地場産業への影響も大きい電機労使の、片側のトップの「これから」に向けた発言には注目せざるを得ないのです。

鈴木委員長は春闘問題について以下の四点について問題を提起されています。

その第一は、「賃金を単独で比較して論じる時代ではなくなりました」ということであり、法定福利費が二倍となっている今日、賃金・一時金・労働時間・退職金・年金・社会保険料・社内福利費など「会社で働くすべての労働条件をトータルで考え、一つ一つの項目の必要性に基づいて焦点

を絞って交渉で取り上げる。

その第二は「産業内や企業にとつて業績動向がこれだけばらついているにもかかわらず、現行賃金水準も大きな格差があるのに、なぜ、賃上げ幅だけをそろえるのか」。

その第三は「産業内にはあつてよい格差と容認できない格差がある。合理的な理由が見出せない以上業績に問題があつても三五歳絶対水準の平準化に向け精一杯努力を重ねるべきであつて、連合が産業を續いて、引き上げ幅で全体をまとめる必要はない」。

その第四は「むしろ連合はセイフティネットとして賃金の絶対水準によるナショナルミニマム・個別ポイントの最低賃金、例を申し上げれば、三五歳の現場労働者であれば、日本国内でも二〇万円とか二〇数万円は保障させる、というような運動に特化すべきである」というものです。

この発言に「春闘放棄」というレッテルを張り付けることは簡単です。しかし先ほど確認した雇用情勢の中で、大手企業の企業組織と雇用関係・労使関係が大きく変わろうとしている中で、「三五歳絶対水準」を確保することを産別の絶対的な使命とする方針に理解はできません。

しかし、先ほどから明らかにしているとおり、中小企業はこれと異なる現実にあります。中小では大企業の再編成などにより、絶対的な雇用危機に直面しており、また定昇制度の賃上げと大幅な一時金減で生活水準・文化水準にまで格差が及んでいるのです。賃金闘争を毎年やらなければ格差はますます広がる、という現実には直面しています。

また、中小企業での賃金問題の現実には、企業規模が小さくなればなるほど「定昇制度」「賃金テール」などないのです。中途採用者の賃金決定に象徴されるように、採用時の景気や面接の時のやりとりなどにより、個別的に決まるといふものです。「春闘」はもともと事情が異なる大企業と中小企業にも、「相場」が波及すること、社会的な賃金決定システムとして機能したのです。

この機能に関して、鈴木委員長は連合の任務として「セイフティネットとしてのナショナル・ミニマム・個別ポイントの最低賃金の闘い」を提起しています。

全国一般の立場からすれば、連合が違ひは違ひとして連合内の議論を整理し、各産別の闘いを調整するとともに、「ナショナル・ミニマム」の闘いは、長年の二重構造と不公正な社会構造と関係している課題であるから、連合独自の闘いとして春闘を再構成する、ということならば積極的に賛成したいと考えます。したがつて、すべての構成産別と地方連合がこのナショナル・ミニマムの運動に責任をもつてかわかることが条件であります。

たとえば各産別の実在の組合員の年齢別の賃金水準の公開など、情報公開等を積極的にすすめていただきたい、という立場にあります。また、系列企業へと賃金水準を波及させるとともに、連合の中央・地方において、各産別がナショナル・ミニマムの運動を積極的に応援する体制づくりが必要だ、ということ です。

このナショナル・ミニマムの闘いについては、笹森事務局長も重視されていると聞いております。報道された六月一六日の全郵政定期大会での事務局長の「本当に雇用を守るのなら、賃金との関係である一定期間、働く側の痛みを分かち合うことを労働組合も考える」という発言のさす「痛みを分かち合う」賃金の部分と、ナショナル・ミニマムの部分はまったく別である、と考えておられるものと推察しております。ナショナル・ミニマム社会的な賃金水準の底上げ運動は、ナショナルセンターの使命として、非妥協的に闘われるべき運動と考えるものです。春闘においても二〇を超える地方連合で、賃金調査をベースに地域ミニマムのとりくみが行われました。全国一般各地方本部もこれに積極的に参加し、〇年度では全体の二〇・五%、連合内の中小構成組織の中でもっとも多くデータを提出してきたものであり、今後ともこの運動の先頭に立つことを、代議員の皆さんとともに確認するものです。

## 押し込まれた現状で進むのは危険

— 国労北海道本部定期大会終わる —

九月二五日〜二六日の両日、国労北海道本部定期大会が開かれた。

挨拶に立った寺内委員長は、一三年目に入った採用差別事件で、「参議院七会派による野中官房長官への要請と官房長官の談話と進みながらも、大きな節目を迎え膠着状態にあ

る。「解決は出口が大事であり、闘いの現状をしっかりと見つめ、譲れるものは譲っても解決すべき」と述べた。また、国労中央本部の宮坂書記長は、採用差別の交渉は「足踏み状態」から、「水面下でのツバ競り合いの状態にある」「運輸省は我々（国労）からも意見聴取すべき、政党間協議は約束を守り、政治が真ん中に座り進めてもらう——ことなどを協議している」。このほか、自治体決議の積み上げ、東京高裁の闘いでの世論喚起、シンポジウムなどを通して「闘って良かったと言える解決を図りたい」と挨拶。

経過、方針討議では二〇名が発言。とくに国鉄闘争の「現局面」のとらえ方で、「解決交渉に突入し、激しい攻防が続いている——解決目前にある」とする道本部運動方針案や、この間の機関運営のあり方などをめぐり、激しい討論が展開された。

道本部大会で議論になった「情勢認識」のとらえ方では、「今、解決交渉に突入し激しい攻防が続いている——（解決目前）」この機を絶対逃さず解決を」との道本部提起に異論が続出した。相手側（運輸省）から示されているのが ①人道的観点からの話し合い（新規採用）であり、②国鉄改革関連訴訟の取り下げであるばかりか、闘争団が出した「要求書」そのものが、社民党止まりで相手側に渡っていないことなどからも道本部提起には無理があったのではないか。六月末の政党間協議の凍結以降、七月二十七日（事態打開の話し合い）、九月一六日社民党・浜田政審会長と本部三役の話し合い——（東会社の抵抗が強く、情勢は動いていない）——また、六五回全国大会の委員長挨拶や特別発言などからも、何を論拠に「解決目前」となるのか。「整合性がない」という発言はしごく自然な疑問と言えよう。

論点は「運輸省案をもって押し込まれている現状では、我々の求める解決内容にはほど遠くなる」と言うこと。一方で、原案を支持する意見もあった。「後戻り発言は呑めない」「組織に混乱を持ち込んでいないか」「補強五項目議論に七ヶ月かかり臨時大会で整理を図った。戻せと言うのは物笑いになる」と言う意見である。もう一つは、道本部の機関運営のあり方をめぐっての議論だ。臨時大会開催を要求する代議員署名を、賛否両論がある中で、道本部の代表者が提出したこと、道内議論のないまま道本部委員長が、第六五回全国大会で中央本部委員長に立候補しようとしたこと、中央の機関会議に組合員・家族の意見を反映せず、自らの思惑で動いているのではないか——という意見だ。

書記長答弁では、情勢のとらえ方では 三月の臨大以降、解決交渉に突入していると理解している。七月から政党間協議も再開され、足踏みしているがブリッチェ交渉の形で突入したと見ている。「委員長挨拶の譲れるものは譲ってもは、100%に届かない時に、本部判断で譲らなければならないものは判断する」と答弁。

機関運営の関係では「本部・道本部・地方が一体となって要求実現にむけ運動をどう進めて行くかという立場で発言している」「さまざまな意見があるが全体で確認できるのは、全国大会で決めあった解決要求実現に向けて全力を上げること」などと述べた。

（国労名寄闘争団 『闘いの砦』一九九九・一〇・六）

## ◇ 読者からのおたより ◇

衆院選に立候補します 私はいま、とても悔しく思います。国会の議席を失っている間に、こんな

にも時代がもう一度暗さを漂わせ、人間の存在が大事にされなくなったことに。聞くべき声を聞かない政治に怒りを感じます。「政治って、自分はどう生きていくのか、どんな世の中を望むのかを選ぶこと」、そう分り合いたい。

愚痴をこぼすだけでなく、「何かやってみよう」、「無理は出来ないけどちょっとの努力はできる」、「そう思う人たちが、私のまわりにいる。だから希望を捨てずにいられる。「人が大切にされ、誰も傷つけて、明日も元気で働ける」社会に変えていける。これは私の信念。大きな力ではなく、お金を持つているからではなく、言うべき事をきちんと行っていくことで、私は議席を取りもどします。必ず勝ちます！あなたのご支援を私に。」

編集部より 時代は変わります。自公・民の大政翼賛政治は永田町の小さな世界のことと国民に支持はありません。「職場の安定帯」も変化の兆しが見えます。必ず勝ちます！お身体大切に。

沖繩使節団に参加 第一希望だった沖繩使節団に参加できました。私としても一歩ふみ出すような気持ちでの応募でしたからとてもうれしく思っています。まったくお互いに知り合うことのない人たちがいっしょに沖繩を体験するというのは、刺激的といってもいいでしょう。

今、千羽ヅルを折ってくれた子どもたちにお礼の報告の会をしようということ、大学生の参加者が中心になってその準備を進めています。私もその中に加えさせてもらっています。少し広いつながりの中でもう一度自分を鍛え直すつもりです、頑張りたいと思います。(埼玉・M)

勇気を出してユニオンへ 私たちは、さる九月二〇日、大津市内において、誰でも一人でも加入できる労働組合「滋賀地域合同労働組合(略称・滋賀地域ユニオン)」を結成しました。グチをこぼすだけでは何の解決にもなりません。

一人で悩まず、腹を割って、ひざを突き合わせて本音で語り、仲間をつくっていきましよう。企業や職種の違いをこえ、正社員だけでなく、パート・アルバイト、臨時・派遣で働く人、失業・休職中の人：みんな集まれ！

滋賀地域ユニオンに加入し、労働者としてのあたりまえの権利を主張し、要求を勝ち取っていきましょう。泣き寝入りはもうゴメンです！ さあ、少しでも勇気を出して、滋賀地域ユニオンへ！

(滋賀地域ユニオン)  
編集部より 全国ではさまざまな活動が展開され始めました。東京では「人権反戦委員会」もつくられていきます。矛盾はすべての面から出てきて、民間病院で、介護・清掃、その他の雑用をこなして

日系ブラジル人より 「八年前に日本にきて、民間病院で、介護・清掃、その他の雑用をこなしてきました。毎日、六時半に出勤すると、おむつの交換が待っています。後、おむつの洗濯、窓・ペランダの清掃、シーツの交換、朝の食事の介助、褥瘡の処置のお手伝い、病室と廊下の清掃、お昼の食事介助後、お風呂介助、おやつ介助、爪切り、耳垢掃除、など等。仕事がつづきます。

残業もありました。よごれたシーツ洗ったり、おむつをたたんだり、二〇時半頃までつづけました。はじめの頃、約一〇人のヘルパーのうち日系人は二人でした。仕事のきつさのためか、しだいに日本人はやめていき、殆ど日系ブラジル人になっていきました。この状況をつづけるうち、体調が崩れ、上肢障害が発生してしまいました。」

医療・福祉現場でも『病根』は深いようです。(三多摩労災職業病研究会ニュースNo.一四三より)  
小さなお店始めました 既にお聞き及びかもしれませんが、私ども、この九月二日に、五泉市にて、寿司・弁当・季節のものなどを扱う、小さな店を開くことになりました。五泉市は、妻のふる里であり、実家が長い間、寿司店を営んでおりました。故あって休んでおりました店を、寿司職人である弟とともに妻が再興しようと思いい立ちましたのが、先の統一地方選挙の頃でありました。

厳しい政治的・経済的情勢の中で、何をやり始めるのかとお叱りを頂きそうですが、妻も長い間、私を助けてくれましたので、少しは手助けする番かなとも思います。今日の食生活の中では避けようのない「合成添加物」保存料や殺菌剤を最大限排除して、安全性を重視した手作りのものを提供したいと考えています。

(小林 進・洋美)  
編集部より お久しぶりです。いかがお過ごしかと気になっておりました。お店の方が。新潟に出かけた時は寄らせてもらいます。

うらやまし 相変わらず全国を飛び回っているようですね。いろいろな地域でたくさんの方に会える滝野さんが、うらやましく思えます。これも二十三年という時を筋を曲げずに闘ってきた滝野さんの実績ですね。

(国労・A)  
編集部より 八月末からは旅鳥生活でした。ちとばかり疲れしました。でも「集まる」ことが労働組合再生への第一歩であり、同時にすべてであることの自信が深まりました。さらにご活躍を。